清純な乙女（笑）

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
清純な乙女（笑）

【Ｎコード】
Ｎ７５８３Ｔ

【作者名】
栖坂月

【あらすじ】
ユニコーンは処女しか乗せないのか、そんな命題にぶち当たった彼らは、果敢にも強力な結界によって守られた『聖女の森』へと向かう。その先に残酷な真実が待つとも知らずに……。

（前書き）

えーと、オチありきの作品ですのでネタばれはしませんが、気分が悪くなったら即バックでお願いします。

幼馴染の頼みとは言え、こんな依頼は受けるべきじゃなかったのかもしれない。何だか歯切れが悪かったし、最初からおかしいと思ってはいたのだ。

「ねぇねぇアーちゃん、ひょっとしてアレがユニコーンの森？」

「その通りですっ。霧とか立ち込めちゃって、なかなか雰囲気あるでしょ」

藪睨みで渋々ついていく私の眼前で、凸凹コンビがはしゃいでいる。コッチの不安など察する気もないのだろう。お気楽オーラが天まで届いて、雲一つすら近付けなくさせているかのようだ。絶好のハイキング日和というか、ハイキング以外の何だというのだろうかコレは。

それにしてもアークの奴、最近やたら可愛い娘と行動を共にしているとか聞いてたけど、予想以上の可愛らしさだ。身長は私やアークより頭一つ分は小さいし、小さな顔に丸い目と通った鼻筋が綺麗に配置されている。鮮やかな茶色い髪を後頭部で小さなポニーにまとめ、歩く度にピョコピョコと揺れている。このアホな煩悩の塊が抱きつかないのが不思議なほどと言える。

いや、抱きついているのだろう。それでも尚一緒にいるとなると、相当な猛者か、あるいは変態なのか。まぁどっちだろうと、私にとっては大して興味がない。

「ミラもそんな顔してんなよ。もうすぐ終わるんだから」

「あ、あぁ、そうだな」

アークが私を振り返り、不満顔に釘を刺す。好き勝手やっているようでいて、妙に周囲へ気を配るのは相変わらずだ。私がコイツと異性でありながら友人であり続けていられたのは、唯一抱きついてこなかった特殊な異性であったからというだけじゃない。コイツの人となりが、それなりに不快ではなかったからだ。

とはいえ、今回のコレには少しばかり腹を立ててもいる。
そもそもの始まりは、ギルドに妙な依頼が入ったことにある。
『ユニコーンというのは清純な乙女しかその背中に乗せないと言いますが本当でしょうか。その真偽を確かめて下さい』
実にどうでも良い疑問である。こんなのに大金を積むとか、金持ちのボンボンが考えることは全くもってわからない。アークと同等かそれ以上のアホである。
しかし幸か不幸か、本来なら馬鹿馬鹿しいの一言で片付けられる依頼に同属の嗅覚が反応したのかアークが釣られ、私も巻き込まれてしまった。いや、成功報酬の美味しさから考えれば、割の良い仕事ではある。ただ、正直に依頼内容を明かして頼まれていたら、絶対に断っていただろう。むろん、だからこそ黙して頼み込んできたのだろうが。
コイツ、どんな意図で私を巻き込んだのだろうか。
まぁ何にしてもユニコーンが処女しか乗せないなんてのは単なる迷信だ。仮に私が乗れたからといって、それで処女が確定するワケでもない。もちろん、全力で睨んで乗せないよう交渉してみるつもりではあるが。
というより、わからないのはアークの相棒、クリスと名乗った少女の方である。彼女がユニコーンに乗れたところで、そこには何一つ意外性がない。極々当たり前の光景だろう。それとも、こう見えてエロに狂ったビッチだとでも言うのだろうか。
いやいや、このアホに女を手篭めに出来るような甲斐性があるとは到底思えない。事実ここまでを見る限り、二人の関係は良心的に見てもお嬢様と召使い、率直に言えば先輩とパシリ程度の関係にしか見えなかった。
私に対してはタメ口なのに、少女に対しては丁寧な口ぶりって、違和感ありまくりでしょーに。
「よーし、着きましたよー」
無事に森へ入って、とりあえず一つ目の難関突破を確認する。実

はこの森、金属製品を身に着けていると入れないという極めて特殊な結界が張られている。いつもなら町の外へ出る時は帯刀している私が丸腰で出歩くのは、少しばかり心細かったのも事実である。もっとも、それなりに体術には自信もあるので、不安というほどのこともなかったが。

「それでユニコーンは？　ユニコーンはどこ？」

クリスが早速とばかりに騒ぎ始める。問題はむしろここからだ。この森は地図を見ただけでも結構な大きさがある。この中で、ただでさえ見る機会の乏しいユニコーンを探すとなると、どれだけ時間がかかることやら――

「あ、いた」

マジでっ？

クリスの指差す先を見ると、確かにねじれた角を生やした白馬が居る。いや、居るというかこちらに向かって駆けてくる。もう何か一目散なんだけど。

あ、何だろ。ユニコーンの目がコッチを向いた瞬間、ちょっとイラッとした。これはアレだ。アークのアホに見られた時と同じような感覚だ。無礼というか失礼というか、圧倒的に格下の癖に上から目線をされたみたいな感覚である。

とりあえず殴りたい。あの角を折ってやりたい。

そんなことを思いつつ睨んでいる私の視線など意に介していないかのような素振りで、アホ馬はこちらケツを向けるなり膝を折って背中を差し出した。これは恐らく『乗れ』と言っているのだろう。

もちろん、その対象は私じゃない。背中も視線もクリスへと向けられたものだ。

まぁわかってたし。悔しくなんかないし。

「え、乗っていいの？」

「もちろんですよ、クリス。この面子でユニコーンに乗る資格が居るとすれば、それは貴方のみです」

アークがへこへこと頭を下げる。

確かに私がユニコーンの立場でも、この少女を乗せようと思うだろう。その点については理解も納得もしている。だがしかしだ。それをコイツに主張されるのは不愉快である。

コイツも後で殴っておこう。

エロい目をした変態白馬に跨って森の中をウロウロしている少女と、それを見守る二人の保護者、この構図自体が微笑ましいを通り越して何だか虚しい。というか、何で私はこんな所に突っ立っているのだろうか。

まぁいいか。とりあえずこれで清純な乙女が選ばれますって証明が完了したってことなら、楽な仕事だったと割り切れるだろう。

「やっぱさぁ――」

そんな内心の整理を知ってか知らずか、私の右隣に立っているアークがボソリと口走る。

「清純な乙女しか乗せないとか、迷信だよな」

「え？」

「だってアイツ、男だぜ？」

「え？」

なにそれこわい。

「しかも俺達より年上だぜ？」

「え？」

なにそれもっとこわい。

「まぁ可愛いから俺はアリだと思うけどなっ！」

「……」

駄目だコイツ、早く何とかしないと。

いや、最初から手遅れか。

あのユニコーンも、まさか自分の背中に乗っているのが『男の娘』だなんて思っても……いや、あるいは知ってて喜んでいるのかもしれない。そんな顔をしている気がする。

この世はもう駄目だ。

そう思った私は、次の日魔王軍に志願した。

（後書き）

一回使ってみたかったんですよねぇ、『なにそれこわい』ってフレーズ。
それだけで満足です、ハイ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7583t/

清純な乙女（笑）

2011年6月2日14時10分発行